蛇がダンジョンに潜入するのは何かの間違いである

Zero Stella

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ｇｒｏｕｎｄ　ｚｅｒｏ

全ての運命が定まったあの日、ＭＳＦ壊滅の日にスネークは消息不明となる

蛇は元の世界から姿を消し、神と冒険者達の世界『迷宮都市オラリオ』へと迷い込む

正義の女神アストレアと安寧では生きれない蛇

これは蛇と、アストレアを慕う一人のエルフのどこか似た二人の物語

”仲間を失い　帰る場所を失い　それでも　俺達は生きている限り戦士でいることしかできない”

目次

序章　渡り蛇
act 1-1 …… 1
act 1-2 …… 8
act 1-3 …… 15
act 1-4 …… 23
act 2-1 …… 33
act 2-2 …… 42
act 2-3 …… 50

序章　渡り蛇

ａｃｔ　１―１

暗く沈む意識の中で、蛇は自らの身体の状態を分かっていた。
自分の師を殺害した任務でも、耐え難い程の負傷はなんどもしてきた。それ以前の任務でもだ。だが、今回はそれらと比べものにならないレベルだ。
爆発とそれによる金属片、海面に打ち付けられた衝撃で全身火傷と打撲だらけで、骨だって2桁は折れているかもしれない。おまけに今この装備で泳げる程に状態は良くなかった。
いつかは死ぬのは分かっていた。今まで多くの敵がそうだったように、自分にも死ぬ時が来ただけだと蛇は思うだけだった。
コブラ部隊も、ＦＯＸ部隊も、ザドルノフも、ジーンも、そしてザ・ボスも。自分と戦った全ての敵がそうだったかは知らないが、少なくとも蛇に後悔はあれど憎しみはない。寧ろ、ある種の安堵すらあったかもしれない。
戦う者はいずれ何者でも勝者と敗者に分けられる。勝者は生き残り、敗者は死ぬ。勝者に安堵の日はなく、戦場に残り続け、敗者には永遠の静寂が訪れ、戦場から解放される。生き残った勝者は死ぬその瞬間まで戦士として生き続けなければならない。
蛇の持論からすれば、漸く彼は戦場から解放されるのだ。
もう、銃を持たなくてもいい。
ある種の安らぎに、彼は水の中で意識を手放した。

◇

世界唯一の迷宮都市オラリオ。そこは人と神が共存する街。神は人に、怪物（モンスター）とも互角以上に戦う事ができるようになる力、神の恩恵（ファルナ）と呼ばれる力を与え、その対価として自分達が地上で生活をする手伝いを……有り体に言えば養ってもらっていた。

神は自らが力を与えた者を眷属（かぞく）と呼び、それらを集めた組織ファミリアを作り始めた。そしてファミリアに入り、神から恩恵を与えられた者は、迷宮（ダンジョン）から湧き出るモンスター達を屠れるようになり、次第にそのダンジョンの内部を探索する冒険者と名乗るようになった。そこで取れるのは、希少な鉱石や薬草、そしてモンスター達の核である魔石。どれもがダンジョンからしか手に入らない代物なだけに、一攫千金を狙いオラリオを訪れる者は爆増した。

それは神達からすれば自らを養う者が増える事ということで、全く問題視してはいなかった。が、むしろ治安的な意味では致命的なまでにマズい事だった。確かにオラリオは神が多く住んでいて、彼らが作るファミリアに所属する冒険者が多い街だが、それ以上に彼らの生活をサポートする一般人も多い。彼らからすれば、恩恵を得てモンスターを狩れるようになっている冒険者は、ある種恐怖の的であるのは間違いなかった。

しかも、神はその点に関しては基本無干渉だった。神からすれば面白ければ良いのだから。退屈だという天界よりも面白ければ何でも。

だが、捨てる神あれば拾う神ありという通り、秩序や正義を司る神なら話は別だ。

そのような話で第一に上がってくるファミリアと言えばアストレア・ファミリアだった。

秩序と正義の神アストレアが主神であるそこは、その神の名に恥じぬ働きをするファミリアで、ギルドなんかと協力して街の治安を維持する憲兵のような役割も担っているファミリアだ。

彼らのファミリアはとても大規模とは呼べない人数だったが、そのいずれもが第二級冒険者以上という精鋭で、少人数でありながらも仕掛けられた戦争遊戯（ウォーゲーム）では無敗、最高到達階層は４１層であるなど相当な実力の保持者が集っている他、その献身的な働きぶりからオラリオ中の人々からの信望も厚いファミリアだった。

そんな彼らの中でも特に戦闘力が高かったのが、Ｌｖ．４の冒険者【疾風】リュー・リオンだ。高い機動力と魔法による超火力を両立した、高度な技術を持つ魔法戦士。

彼女は高潔なエルフで、アストレア・ファミリアに入って数年経った今、仲間と打ち解けているのにも関わらずソロでダンジョンに潜るのも珍しいことではなかった。
Ｌｖ．４ともなれば中層のモンスターには遅れをとることはないため、周りも心配していなかった。
だが、ある日の事だ。今日も今日とて１人でダンジョンに潜りに行っていたリューが、どうも帰ってくるのが遅いのだ。普段なら夕方には帰ってくるというのに、もう日は落ちている。
ファミリアの団長であるアリーゼは、団員の１人をバベルまで向かわせ、ギルドに確認をとることにしたところ、リューの所在はバベル内に設置されている、ギルド運営の病院の中だというのだから慌てて連絡すると、リューが病院に運び込まれたのではなく、リューがダンジョン内で倒れていた人を運び込んだのだという。
「なーんだビックリした」
「ま、考えてみれば心配するだけ無駄だったかもね」
「それはどうでしょうね」
団員達は安心したが、そこへ部屋の奥から一人の女性が、いや女神が現れる。美しい金髪を腰まで届きそうなロングにしているこの女神こそが、アストレア・ファミリアの主神であるアストレアだ。彼女の宝石のような碧眼は真っ直ぐとバベルを見据えているが、その眼差しは悪人を裁く時の目である。
それを見たアリーゼは、普段の緩い雰囲気をなくしてこちらも真剣な声色で問う。
「どういう事でしょうか」
「感じた事のない気を感じます。どこか矛盾した、邪悪な……いえ、悪ではなく善の感じはするのですが、どうもおかしい」
神の中には、人間（こども）の中にあるものを見る事ができる神がいる。
例えば美の神フレイヤは、人の心の色を見る事ができるだが、それと同じように女神アストレアは人の中に眠る善や悪の価値観、その人がどちらに傾いているかが見れる他、それが強ければ強い程に遠くからでもその感覚を感じ取る事ができる。しかも過去に犯罪ファミリ

アの捜索にその力を使った程に正確に分かるのだ。
過去に何万人もの人々の心を読んできた彼女は、そのダンジョンでリューが助けたという男の独特な、そして何万もの人になかった異様なモノを感じたのだ。
今オラリオは闇派閥（イヴィルス）と呼ばれる組織が次々と現れ、人々に混乱と恐怖を振りまく存在が蔓延る世界だ。ともなれば、それ関係の人間だとしてもおかしくはない。
「アリーゼ、リューを迎えに行くついでだ。私も連れて行ってくれないか」
「アストレア様?!」
闇派閥からすれば、神殺し（禁忌）だってなんてことはないはずだ。噂でしかないが、オラリオにいる神が姿を消したなんて話だってある。
だからこそアストレアは、その性質上狙われやすい立場にあるこのファミリアの主神として、よっぽどの事か神会でないかぎりは外出を控えていた。
だが、アストレアからすれば今回の件はそのよっぽどに含まれるものだった。
「私には、その者を確かめる義務がある」
闇派閥の者であったなら、すぐさま断罪を行う必要もある。これ以上、アストレアはオラリオに闇の時代を続けさせたくはなかったし、自分の眷族が闇派閥との闘争のために死んでいくのも見たくはなかった。
だからこそそれを見定めて、可能であれば自分の手の届く範囲に――つまるところは自分のファミリアに置いておきたいという思いがあった。

・・

まず感じたのはほんのりとした光。そして、閉め忘れた窓からささ

やかな風が入り込むような、無に近い音。
蛇が目を開くと、そこは真っ白い部屋だった。だが、そこは天国ではないらしい。どうもここはどこかの病院で、自分はそこの一室のベッドに寝かせられていたらしいと、蛇は理解したが、どうも変だった。
時計やカレンダーは部屋になかったが、髭や頭髪の伸びから察するに、どうもそんなに月日は経っていない。いや、数日あるかないか程度のものだろう。
だというのにだ。シーツをどかして体を見るも、あの時にできた傷は無いし、痛みもない。更に不気味だったのは、過去の古傷の幾つかがなくなっていたことだ。
そして何より、置いてあった新聞の文字が読めない。
(そんな馬鹿な)
見る限り、ここはアメリカや西ヨーロッパ諸国程ではないにしろ相当に発展した土地の筈だ。それは、この病室であろう部屋や、新聞の存在からも明らかだ。そんな国は世界でもひと握りだ。何ヶ国語も習得した彼は、そのひと握りの国の言葉は殆どペラペラなのに。それなのに、未だ自分が見た事のない文字でそれは書かれていた。
じゃあ、いったいここは何処なのか。その疑問が破裂しきれんばかりに膨れたところで、部屋のドアが開かれた。
助けてくれたのだから、まぁ恐らく敵意はないだろう。そう思えるのに、兵士というものの職業病だろう。身体はその身を隠せる場所を自然と目で探し始める。
それをぐっと心で抑え、人が入ってくるのを待つ。
「アストレア様、アレが例の男です……あら、意外に早く起きたんですね」
「リオン、アレではなく彼です。災難だったようですね。私の名はアストレア。あなた、自分の名前は分かりますか?」
やってきたのは、金髪で耳が普通の人間よりも長い女性と、同じく金髪のしかしもう一人より凛々しい女性。前者は外見に明らかな特徴があるが、後者は後者でまともな人間ではない。というより、人間

離れした感じがした。
また、話している言葉は何故だか理解ができた。いや、できてしまったが正しいのだろうか。知らない言葉の羅列のはずなのに、頭にその意味がスッと入ってくるような、そんな違和感のある感覚があったが、それでも全く何を言っているかわからないよりかは１００倍良いに違いない。
理解できてしまったがために、名乗ってきたアストレアという名の金髪の女性からの質問に、果たしてどう答えるべきか蛇は悩んだ。
彼は兵士であり諜報員だ。本当の名を言うのは憚られた。彼らの素性もわからない。バックにいる存在もだ。だが、黙秘はかえって誤解を生む原因にもなる。
とりあえず偽名でも名乗っておくとしよう。そう考えて、頭にパッと浮かんだ名で応える。
「俺の名は、イシュメール……」
「嘘ね」
面食らった。まさか一発で嘘だとバレるとは思わなかったのだ。
裏の世界では、自白剤や嘘発見器は使われる事があるが、まさかそのような装置もないのに、嘘がバレるなどと考えた事もなかった。例えるなら逆自白剤のようなものだろうか。相手が嘘を言ってるのが分かるようななにかがあるのだろう。
などと考えていたら、アストレアと名乗った女性から補足を付けたした。
「神には嘘はつけないのは知っているでしょう？　ほら、あなたの名はなんですか」
「生憎俺は無神論者なんでな」
宗教があり、それを取り仕切る巫女のような存在がいて、病院を作れて尚且つ重症の患者を数日で完治させる程の医療技術を有し、そして蛇が知らない文字を使う国は聞いたこともない。
かといって、自分を混乱させるためにＣＩＰＨＥＲ（ゼロ）がこれを仕組んでいるとも考え難い。
であれば、彼女は本当に神なのか？

かつてＵＭＡであるツチノコを食べたスネークだが、それでもそれは信じる事ができなかった。のだが、アストレアは無神論者という言葉を聞いて、死ぬほど笑い始めた。それはもう猛烈に。
「あなた、それ本気で言ってるの？　ぷっ、あっハハハ！　あぁ、もう、信じられない。こんなに笑ったの久しぶりだわ」
「何がおかしい」
「いやいや、だって、ねぇ……まさか、私達の存在を知らない子供たちがいるはずが、な、い……あれ？」
少し言いよどむと、アストレアは隣の女性に話しかける。「オラリオで神を知らない人がいるか」と。すると金髪の女性は即座にＮＯサインを出す。そんな筈がないと。その問いに少し考えこむと、再び同じ質問を繰り返す。
しかし、今回は先ほどのような朗らかな表情でも、柔らかな雰囲気も消え去っている。それこそ、本当にこのアストレアという人物が神であるかのような、そんな神々しくも恐ろしいオーラが見えるようだ。
「もう一度だけ問います。あなたの名前はなんですか」
これはもう逃げられないんだろう。そう蛇は理解すると、自分の通り名でありコードネームを口にする。確かに本名ではないが、しかし自分を表す単語としては、恐らく最も適当であろう名前。
その名を口に出した瞬間に、この物語は動くとも知らずに。
「俺の名は、スネークだ」

ａｃｔ　１―２

「俺の名は、スネークだ」

スネーク。蛇を表す単語。それが彼の名乗った名前だった。スネークというのがまさか本名であるはずなどないのに、しかしアストレアは神の持つ力を使ってもそれが嘘だと見抜く事はできなかった。つまり、彼の名がスネークだというのは真実であるという事だ。

隣にいたリューは、未だに男が嘘を使っているのだと思い、辟易した態度と表情で「まだ嘘を吐くのか」とイライラした声を出す。それを右手で遮り

「リオン、彼の名がスネークだというのは真実ではあるみたいです……”本当”かどうかは別ですが、一応の真実ではあるのでしょう」

勿論ハッタリだった。だが、まさかこれが偽名でない方がどうかしているのも本当だ。このスネークというのは、彼の持つ所謂《二つ名》のようなモノで、そして長らくそれで呼ばれ続けた名実共にもう一つの名前なのだろう。

とはいえ、この男が相当なワケアリだという事はアストレアも分かっていた。それも、闇派閥といは違う意味でのワケアリだ。彼が今ここにいる事自体、神ですら気が付かないような運命の悪戯の産物なのだろうから。

アストレアはそれを聞き出すには他の者がいない方がいいと思い、リューを病室から無理を言って追い出し、看護師だろうが医者だろうがどこぞの神であろうが追い返すように伝えた。リューは終始良い顔をしなかったが、それでも最後には渋々ではあるものの従ってくれた。

良い眷族に恵まれた事を感謝しつつ、アストレアは再び”スネーク”と向き合う。

「あなたの名前は分かりましたが、どうも腑に落ちない事が多いんですよね」

「それはこっちも同じなんだが……」

「そちらの質問には後で答えますから、まずはこっちの質問を聞いて

くださいます？」
　これ以上おかしな事がおきないように予防線を張ると、ずいとスネークに顔を近づけ、片方しかない瞳を覗き込むようにしながら質問を投げつける。
「神がこの地に降り立ったことはご存知？」
「そもそもここはどこなんだ」
「……オラリオという都市は知っていますよね？」
「どこだそれは」
　頭が痛くなってきた。まさかの事態である。オラリオを知らない？　可能性は低いが、神の存在を知らないかもしれない辺境の村人でも、オラリオの存在は知っている。
　ともなれば、スネークは「この世界の人間ではない」のか。
　まさかである。そんな事は聞いたことがない。だが、この世には信じられない事ができる神々もいるのも事実で、中には時を戻す事が出来る神もいるし、気まぐれでこの地を無くすことだって簡単な神も多い。
　しかも、この地上にいる神が力を使うのは御法度であるが、もしこれが天界の神の仕業だとすれば自然とも言える。
　となれば、ある意味このスネークも被害者と言える。神の勝手に振り回され、どこか別の世界から引っ張り込まれたのだから。
　そんな者を排除するのは、果たして正義を司る神として良いものなのか。いや、良いはずがない。
「スネークさん、まずは先程までの対応を謝りたい。申し訳ない」
「突然どうした」
「さっきから話が噛み合わない理由が、なんとなく分かった気がするんです。そこで改めて、お互いの情報を確認したい」
「……分かった」
　そしてアストレアとスネークは互いの情報を交換し、理解し難い事実を受け止めなければいけないことを互いに理解した。
　ここが世界唯一の迷宮都市オラリオであること
　次に、ここにはアメリカを筆頭に、スネークが知る国家はないこと。

ただ、ニッポンと極東のように似て非なるものや、該当する人種は存在すること。
リオンと呼ばれていた女性のような、耳が長く魔法の扱いに長けるエルフ等、一般的な人間(ヒューマン)以外の種族が存在し、基本的には共存していること。
そして神が実在し、アストレアもその1人であること。
神から力を授けられた冒険者と呼ばれる存在と、彼らが探索する迷宮(ダンジョン)が、世界で唯一このオラリオにはあること。
「信じられん」
「スネーク。で良いんですよね」
「ああ……」
「あなた、この世界に来る直前の記憶とかありませんか？　もしかしたら原因が分かるかも」
「そうだな……どこから説明したもんか」
「まぁ、できるだけ詳しく。できればあなたの事も交えて」
分かったと短く返し、スネークは話し始める。自身の置いていた環境から、その最後までを。

・・

蛇は兵士だった。それもただの兵士じゃない。かつての伝説を倒した、新しい英雄。彼は己と意を異なるかつての仲間との縁を切り、国家というイデオロギーに関与されない、『戦いの中でしか生きられない者のための国家』を作るべく、傭兵として各地を転々とする。
そしてとうとう生まれたのが国境なき軍隊(MSF)だった。
とある戦場で出会った敵にして現在の戦友、カズヒラ・ミラーと共に作り上げた国境なき軍隊(MSF)は、ピースウォーカー事件という契機により、細々とした傭兵ビジネスで食いつなぐ弱小組織から、核兵器を保有するまでに一気にその規模と軍事力を伸ばした。
ようやく軌道に乗るかに見えた経営は、しかしたった一夜で崩壊する。

キューバ米軍基地からかつて仲間でありスパイでもあった少女と、小さな兵士の少年を助け出す為のミッション。スネークがそれを遂行するため、拠点であるマザーベースを離れていたその時、ＩＡＥＡの核査察が来る。そのはずだった。

異例の核査察という嘘（フェイク）を被ってやって来たのは、所属不明の攻撃部隊。

スネークがマザーベースへと帰還する時には、既にその殆どが破壊し尽くされており、残っていたのは司令塔のあったマザーベースの中枢プラントたった1つ。苦しみもそして喜びも共にしたその最初の1つ目のプラントですら、突然現れた敵に制圧されそうになっていた。

副司令のカズヒラも負傷し、戦闘も最早一方的な展開。非常に心苦しかったが、流石にここで海の藻屑になるわけにもいかず、ほぼ全ての仲間を失いながらもモルフォ蝶に乗って離脱した。

機内ではカズが怒りと無念の炎を燃やしていた。硬い鉄板に拳を叩き付け、仲間を失った悔しさ、そして未だに全貌が掴めぬ敵であるサイファーへの憎しみを吐き出した。彼はスネークほど心が強くなかったから、愛着のあった拠点と仲間達の喪失は相当堪えていた。

だが、それで終わりだったらよかったのに、相手は蛇とその一行を確実に殺しにかかっていた。ヘリを追跡し、対空ロケットランチャーを手に猟犬となって追いかけてきたのだった。

元々戦闘用でない、潜入任務用のヘリコプターであったモルフォには、赤外線誘導を阻止するフレアなどは搭載しておらず、その直撃を喰らってすぐさま燃える鋼鉄の棺桶と化した。咄嗟にだろうが、ＭＳＦで一番の能力を持つメディックが爆炎からスネークを守ってくれたが、それでもヘリが落下するのまでは防ぐ事ができないのは必然であった。

結果、羽根を毟られたモルフォ蝶は、翼に乗っかった数名と共に海に沈んだ。

・・

「そうだ、あの時ヘリが墜落して海に叩き付けられたんだ」
「それから？」
「いや、ここから先の記憶がない……失神していたか、はたまた突発的な記憶喪失か」
そうは言ったもののスネークは、微かにその時の記憶は持っていた。誰かが自分を呼ぶ声を。それも、一人の声じゃない。何人もの声。
ミラーの「死ぬな」という祈りの怒声、ソローからの朧気な激励、ゼロからの死を望まぬ言葉、オセロットの願いの叫び、そして、どこからか聞こえてくるわが師ザ・ボスの声。
誰もが自分に何故だか叫んでいる。
だが、肝心なその訳が、その理由と意味が分からない。もしかしたらこれは性質の悪い悪夢なんじゃないかとすら、未だに思えてくる。たった脇に畳まれたスニーキングスーツの横に置いてある、サバイバルナイフを手に血を求めて歩くドラキュラの悪夢をまた見てるんじゃないかと。しかしそんな現実逃避すらこの世界は許さず、唇を噛めば血が出るし、手を握り込めば自分の握力で自分の手が痛かった。
――――何があったんだ？　教えてくれ　俺はどうなってしまったんだ
「なぁ、帰れると思うか？」
そんな心が表に出たのか、はたまた無神論者というのが目の前の存在によって崩れ去ったためか、スネークは珍しく弱音を吐いた。
しかも、いつもならカズヒラが冗談交じりに平気だろうと楽観的な言動をしたり、ゼロ達が無線越しに励ましたり助言をしてくれるが、ここでは、いやもう二度とそんな事は起こってはくれないのだから。
アストレアはスネークの心を察したらしく、大丈夫さと励ますべきか、現実を突きつけるべきかで数瞬迷い、そして後者を選んだ。この男がそんな事で諦める男ではないと睨んだから。
「私は原因は分かったとしても、現段階ではどうする事も……」
「そうか」

「ごめんなさい」
少し諦めたような声が出て、自分がなんだかんだ言ってあの世界を愛していたんだなと実感する。
半ば呪いのような日々、そして周りから際限なく上がる評価、世界中が自分が最愛の人を殺した事を褒め称える。お前は『ＢＯＳＳを超えた、ＢＩＧ　ＢＯＳＳ』だと。もう散々だとすら思った。国の為に戦い、そして国の都合で消され合うなど。
けれど結局、スネークはあの世界が憎めなかったんだろう。
それと同時に、ピースウォーカー事件の後に宣言した、自らＢＩＧ　ＢＯＳＳであるという名乗り。あれもここではナシにしようと決意した。
ここにあの人がいないなら。自分を兵士にしておきながら、最期は武器を捨て願い祈るなどという、自身を否定するような選択を取った彼女がいないなら、そもそも自分はＢＩＧ　ＢＯＳＳである必要性すらないのだと。
消沈していく気持ちを無理やり変えようとするスネークの両頬っぺたを掴みながら、アストレアはその顔を上げさせて提案した。
「ねえ、スネーク」
「なんだ」
「一つ提案があるの。私のファミリアに入らない？」
彼女は、自分の眷属（アストレア・ファミリア）に入れば、闇派閥との闘争の激しいこのファミリアに入れば、もしかしたら今回の件に関わっている者達の事が見えてくるかもしれないと言った。それに、ここにいる限りは金も必要になるだろう、と。
スネークからしてみれば、確かにそれはアストレアのいう通りだったので、断る必要性は殆どなかった。
「ふむ、そうと決まれば……リオン！　こっちに来て！」
アストレアが病室だというのに大声で呼ぶと、さっきまで人払いに精を出していたリオンという名のエルフが部屋へと入ってくる。話が微妙に聞こえていたのであろうか、肩はプルプルと小刻みに震え、そしてスネークをにらみつけた。その様は人、いや高貴なエルフとい

うよりも猪突猛進するミノタウロスのようだ。
　それは蛇に対しての拒絶反応だろうか。
「アストレア様、本当にこんな得体の知れない者をこのファミリアに入れるつもりなのですか!?」
「でも、助けたのはあなたでしょう？　あ、そういえばあなた、男の事が触れるようになったのですね。これは皆に報告をした方が……」
「待ってください！　それは救助活動だからだと言ったはずでしょう！」
　リオンの反論に対し、鋭い一撃をアストレアが突き刺すと、リオンは顔を真っ赤にして怒りながらそれを否定した。スネークは気づいていないが、エルフの中でも人一倍他人、特に男に触られるのを嫌うリオンが初めてオラリオで自分から触れた男は、スネークなのであった。勿論、救助の為に必要ではあっただろうが。それにしたって、あの疾風が自分で男を担いでギルドまで来たものだから、ちょっとした噂位にはなっていた。
　ともかく、最も反対するであろう人物を黙らせたという事もあり、アストレアは再びスネークに挨拶を行う。
「それでは改めまして、ようこそ正義と秩序のアストレア・ファミリアへ」

ａｃｔ　１―３

オラリオ郊外、賑やかな大通りから離れたところにあるのが、アストレア・ファミリアの本拠地である「星屑の庭」である。
バベルへと向かう道から離れた場所にあるこの館は、朝や昼間はともかく夕方にもなると人通りはかなり少ない道に面している。街の人々は他のファミリアと同じようにバベル近くに拠点を建てなかったのかと不思議がっていたが、アストレアとしては、闇派閥との闘争が激しいがための一種の配慮であった。
人通りが少なく、周りが住宅地でもないこの辺りは、もしもファミリアが襲われたとしても無関係の人々に被害が及びにくいという理由があったのだ。
そんな星屑の庭に、３人と１柱が帰ってきた。そのうち一人は初めてここを訪れる人物である。
アストレアは館の扉を開くなり、団員を全員召集してその一人の事を紹介し始めた。
「皆、あのリオンが助けた男の事は聞いてるでしょう。こちらの彼がその本人です。名はスネーク。今日から私達の仲間入りです」
その紹介にファミリア一同は特にあのリオンがという点で注目したが、アストレア・ファミリアの中でも随一の実力者である輝夜は、むしろ訝しんだ。
「仲間入りですって？　そんな何処の馬の骨とも分からん奴を改宗させるというのですか」
この指摘は確かに当然のものであった。日頃からオラリオ中を駆け巡っている彼らは、良い意味でも悪い意味でも顔が広い。有名どころのファミリアの団長から、零細ファミリアの団員まで大抵は顔見知りであったりする。そんな彼らが知らないという事は、最近オラリオに来たのか、それともなければ闇派閥の団員か。
極東の政争の惨状を知っている輝夜だからこそ、そういった面には人一倍敏感だった。
「説明不足でしたね。ファミリアについては問題ありません。なぜな

らこの男、スネークは無所属なのですから」
「無所属ですって？　つまり、レベル０だというのですか？」
「ええ、彼は改宗（コンバート）をするのではありません。このアストレア・ファミリアに入団しに来たのです」
　その言葉に再び全員がざわめく。人間は神の恩恵があって初めて、モンスターと対等以上に戦う事ができるのだから。逆を言えば、神の恩恵を受けていない状態、つまりは輝夜の言ったレベル０では満足にゴブリンすら狩れない。いや、逆に食料になってもおかしくはない。
　だからこそギルドは、ファミリアに加入している者のみしかダンジョンに入れないように規則を定め、サポーターですらステイタスを持つ事を義務付けている。
　だというのに、ダンジョンにレベル０で入り、あろう事か中層にまで行って倒れていた等どう考えても『普通じゃない』
　そこに石を投げたのが、小人族（パルゥム）のライラだった。
「そいつは寧ろ怪しくないかい？　つまるところ単独でダンジョンに入れるなんて、怪人か……もしくはダンジョンへの裏口を知ってる奴になるだろう」
　それからも幾つも質問という名の尋問が続いたために、アストレアは閉口してしまった。本当はそれこそややこしくなるから、団長のアリーゼと当の本人であるスネーク、そして助けたリューと自分自神の四人のみでの話にしておこうと思ったのだが、アストレアの予想以上に団員達は疑心暗鬼になっていたようだ。
　無理はないし、咎める事などできるはずもない。それもこれも全て、アストレアのファミリアであるからの事であるからだ。
　彼らはつい先日一人の仲間を失ったばかり。こうして疑い深くなるのも仕方のないことだろう。
「分かりました。説明しましょう、何故スネークがダンジョンにいたのか」
　そう言って、アストレアは話し始めた。自分でもよく分かっていないが、何かしら天界からの神の力が働いて起こった出来事であろうという事を。誰がやったのかは分からないからまだ決めつけるのは早

いが、誰かしらの神が暇つぶしにやった事だろうから、スネークには非はないと。
　そして、彼が元々は別の世界の住人だという事も。
「別の世界……ねぇ。なんか、パッとしないけど、そうまでアストレア様が言うんだから間違いはないんでしょう」
「んー、アタシは納得した訳じゃないけどね」
　まだ完全には納得していない約２名を除いた全員が納得したところで、炎のような赤髪がアストレアの目の前に飛び出した。彼女こそがこのアストレア・ファミリアの最古参にして団長アリーゼ・ローヴェル。
　自身を清く完璧な正義の剣であると自賛する少女は、実際アストレアの話を完全に理解できたわけではなかったが、しかし自身の主神と心では同じ想いを抱いていた。それは困っている人を助けたいという、原点にして一番大切な親切な心だ。だから彼女はこの星屑の庭への帰路でこの話を聞かされた時、スネークの入団に全く反論はしなかった。
　そして、それを見たリューもまた、反対しようとすらしなかった。
「まぁまぁお二人さん、そう苛立たないでさ。だったら君達が納得するまで見ているといい。ボロを出したら私かアストレア様に言うといい」
　たったそれだけの言葉だったが、それだけで輝夜とライラは黙りこくってしまった。

≪≫

　ファミリアへの入団が決まったとなれば、次に行うのは歓迎会……ではない。そう、ステイタスの記入だ。
「という事なので、ささ、スネークは上を脱いでそこのベッドにうつ伏せになってくださいね」

「脱げばいいんだな、分かった」
アストレアにそう言われたスネークは、ギルドから頂いたTシャツを脱いで上半身裸の状態になってベッドにうつ伏せになった。
かつては潜入任務中に上半身裸になって「気持ちがいい」と言ったりしたものだが、こう、大勢の前で上半身裸になるのはどうもスネークでも抵抗があった。しかもそれが、若い少女たちの目の前というのも奥手な彼の心に突き刺すものがあったのだった。
「いいですかスネーク。今から行うのは、神と人との契約です。決して私との誓約を違わぬように」
「分かった。そういうのは慣れてるからな」
「なら良かった」
「私が団員に求めるのは、二つ。それ以外は、自らの判断でやってくれればいい」
「一つ。常に正義と秩序に則った人道的な行いを心掛ける事。これは、私のファミリアに入るのならば鉄則です。弱きものを助け、悪しきものを打ち砕く。常に弱い者、正しい者の味方でありなさい。決して悪に堕ちないように」
「二つ。決して犬死にしない事。これはファミリアとしての決まりというよりも、私個神としての願いであり祈りです。無意味な死は許しません。いつの時も、死ぬ時は正しい事をした結果の死になるように。誰かを助けるための死であるように私は願います。なんの意味もなく、突然死ぬなんて事は、私は許しません。そうしたら、私が天界に戻った時に魂の面倒を見てあげませんからね」
「人道的な行いと、犬死にはご法度か……分かった。約束しよう」
「なら良し」
スネークがアストレアの提示した条件を承認したのを確認すると、彼女はうつ伏せになったスネークの上に跨り、その背中を捉えた。そして、いつの間にか用意した左手に持った小さなナイフで自分の右手を軽く斬り、その血を背中に垂らす。神の手から流れた神血（イコル）はスネークの背中に瞬く間に広がっていく。そして、その身に宿った経験値（エクセリア）を読み取り、映し出し、神聖文字（ヒエログリフ）へと変えていく。

未だ血が治まらぬ状態のまま、アストレアはその背中をなぞり、まじまじと神聖文字を読み始めた。そして、そのあまりの内容に驚愕した。
「う、嘘でしょう……」
「どうした？　何か問題でもあったか」
うつ伏せの状態で上に乗っかられているスネークは、首をひねるのもいっぱいいっぱいで、辛うじて真横を向けそうなくらいだったため、アストレアの驚きを隠せない声に不安を感じて問いかけた。
しかしそれは杞憂であった。何故なら、アストレアが驚いていたのはその経験値が異常だったからだ。
「なんであなた、最初からＬｖ．５になれるだけの経験値を持っているのよ……あなた、一体何したの？」
「アストレア様それ、冗談ですよね？」
「私のこの表情が嘘をついている時のものだと思うのなら、あなたは変わってしまったというしかないですよ輝夜」
普通、大抵の冒険者志願者はＬｖ．１でステータスもオール０から始まるのが普通だ。もちろん例外というのもあるが、そもそも完全な生身でレベルを上げるだけの偉業を成し遂げるのは不可能だ。
レベルというのは生物としての格であり、レベルアップはランクアップ。つまりは神という上位存在に一歩近づく事を意味するのだ。ダンジョン内では通常人間が勝てる存在ではないものがうじゃうじゃといるため、レベルを上げる要因は事欠かない。が、それでもオラリオの冒険者の過半数以上がＬｖ．１から上げることができていないのが現状だ。そして、ダンジョンがないオラリオ以外では余計に難しい。
だというのなら、スネークは一体どんな事をしてきたんだか。それは最早常人が考え着くものではないだろう。
そもそもレベルというものを知らなかったスネークは、その存在を教えてもらってやっと理解した。そして同時に理解した。
「なるほどな……ツチノコを食ったのにも意味があったって事だな」
そう、間違った方向に理解した。彼はゼロやシギント、パラメ

ディックが熱弁していた伝説の生物『ツチノコ』を食べた事がレベルアップに一役買ったのだと勘違いしているのだ。実際、確かに凄い事ではあるのだが、世界を三度救った事に比べれば些細な事であろう。

だがしかし、そんな彼の偉業を知る人物はここには誰もいない。しかも、ツチノコのせいだとスネークが思っているせいでアストレアもそれ以上の事が分からないのだからもう性質が悪い。

「ツチノコってなんだ？　それ」

ライラがツチノコについて聞くと、スネークはかつてパラメディックに聞かされた事を殆どそのまま喋って伝えた。

蛇のような姿で、腹の周りが少し太っている大柄な蛇。日本各地で目撃されていたとされる伝説上の生物で、それを自分は過去に発見して食べた事があるのだと。

伝説の蛇を蛇の名を冠するスネークが食べるという事にライラはゾっとすると、同時に『大柄な』伝説の蛇の姿を想像し、第二級冒険者以上が複数人集まってやっと倒せる階層主級のモノを頭の中に描いた。確かに階層主をＬｖ．０で倒せば、英雄譚に描かれる程のものになるだろう。

「まぁとにかく、あなたの物語は今度聞かせてもらいましょう。なんだか面白そうですし」

「ですが、当分スネークはＬｖ．１でいかせますからね」

アストレアはＬｖ．１以上にする事を認めなかった。例え彼がＬｖ．５になれるだけの素質があるとしても、彼が今まで戦ってきた環境とこのオラリオでは大きく環境が異なるはずだ。それは、彼が見つかった際に身に着けていた見慣れない武器からも想像できる。

だからまずは、アリーゼ達からダンジョンでの戦い方と生き方を学んで欲しいのだった。

そして神という存在の本能で、後々隠しパラメーターとして役立ってくれる低レベル時のステイタスもしっかり身につけてほしいというのも少なからずあった。

「戦力としては早いところ上げてほしい」という輝夜の意見もあったが、アストレアが一言ダメだと言うと、おとなしく引き下がり、それ

以降誰も文句は言わなかった。実際、アストレアは頑固な性格で、これと決めたらやめないタイプだった。
「入団の儀式」が終わり、一息というところで、アストレアはそういえばという感覚で再びTシャツを着ているスネークを見ながら、こう告げた。
「あ、そうそう。スネークはたぶんオラリオの事も良く分からないだろうし、暫くは一人行動はダメね。……で、リオン、あなたがスネークに色々教えてあげてね」
「え、私ですか!?」
「そりゃあなたが助けたんだし、一番接点があるからぴったりでしょう?」
「し、しかし」
「そうなのか?　よろしく頼む」
「いやまだ承諾はしてないです!」
　これまであえて会話に加わろうとしていなかったリューは、いきなり主神に自分の名前を呼ばれて跳び上がる程に驚いた。というのも、こういったことはやった事がなかっただけに、尚更そういうのはアリーゼやライラのような適任がいるだろうという気持ちにもなっていたのだ。
　その様子にアストレアは保護者のような笑みを浮かべると、初心なエルフに向けてこう言った。
「まぁまぁ、あなたがオラリオに来て初めて触れた男なんだから優しくしてあげなさい」
　普段そういう事を言わない主神の悪ふざけに乗っかって、アリーゼが「ほうほう、あのリオンがついにその手を許したと」などと悪乗りしたのが運の尽き。ここまできてしまえばリューがいくら「人命救助には仕方がない事だ」とか「そうじゃなきゃ運べないでしょう」なんて言っても誰も聞く耳を持たない。
　しまいには、リューの事を好敵手だと言っている輝夜に
「ま、お堅くて高貴で子供っぽいポンコツエルフの貴様に無理なら、仕方ないですから私がその役目を持ってあげてもいいですけれど?」

などと焚きつけられ、良くも悪くも真っ直ぐなリューはとうとうその言葉を言ってしまう。

「ええ、分かりました！　いいでしょう！　スネークさん、私は加減ができないですからどうなっても知らないですからね！」

挑発にリューが乗らないようになるのには、相当な時間がかかるようだ。

act　1―4

スネーク　《アストレア・ファミリア》
Lv．1
力：B　765
耐久：A　882
器用：D　573
敏捷：C　612
魔力：I　0
潜入：B
《魔法》
【】
《スキル》
【】

これが、アストレアがスネークに与えた、いや許したステイタスだった。
初心者冒険者としては十分すぎる、贅沢な高ステータスに加え、神が見たことのない発展アビリティ。そしてつける事ができた筈のスキル枠は空っぽになっている。
ただこれは実際には、経験値を使ったものではなく元々スネークが持っていたステイタスであり、これ以上はアストレアをもってしても能力を下げる事ができないのだった。スキルの一つも勝手についちゃってるのではと危惧したが、流石に経験値依存だったのか、スキルは付いていなかった。
が、それでも勝手に付いてきたものがこの「潜入」という発展アビリティ。彼の話の所々に出てくる事柄が関係しているのか、異常にランクも高かった。
つまるところこの男は、Lv．0でありながら冒険者に匹敵する能力があったわけだ。その事にアストレアは薄く苦笑いを浮かべつつ、

ステイタスを記した紙をスネークに手渡した。
「こいつが俺の今の能力って訳か」
細かい数値よりも、スネークの気を引いたのは等級を表すアルファベットだ。これだけはしっかりスネークの知る文字だった。
それならば、と他の文字も注意して見てみると、間違いない。この世界は基本的に英語が話されているようだ。
ただ、文字はギリシャ文字に近い上、元々無かった言葉も幾つもあるし、今までは意識せずに聞いていた言葉も、よく聞けば相当訛りの強い英語だと理解できる。
現地語の習得は潜入の基本だとスネークはよく言ったものだが、なるほど今回はかなりスムーズにマスターする事ができそうであった。
改めてステイタスを読むと、自分の耐久が高いところに納得できたり、逆にもっと器用じゃないかと思ったり。
（そういえば、カズはＭＳＦのスタッフの能力を同じように格付けしてたな ）
数字の横のアルファベットを見てスネークは、マザーベースでの人員配置を楽にするために、副司令のカズヒラがスタッフ全員の素質や能力をデータ化して纏めていた事を思い出す。
結局、「配置を決めるのはボス、あんただ！」などと言って、纏めるだけだったのには苦笑いしたものだが、ああやって見やすくするのは良いアイデアだとも思ったのを覚えていた。なにしろサンヒエロニモ半島事件と比べ、やる事が増え班の数も多かったが、戦闘以外はどうもスネークは見定めるのが厳しい面があったのだ。
そう考えれば、確かにこのステイタスというのは合理的で便利な見た目をしているものだ。
パッと見ですぐその人の力が分かるアルファベットに加え、拮抗した実力者同士では数値をもって比べる事ができる。
「そういえば発展アビリティてのは、なにか効果があるんだったな？」
「ええそうよ」
「じゃあ、俺の【潜入】ってのもいい事があるのか」
「たぶん」

「たぶん？」
「仕方ないでしょう？　そんなアビリティ聞いたことないんだから」
アストレアは手元にあった、現状発見されている魔法や発展アビリティ、スキルを纏めてあるギルド発行の辞典をパラパラと捲りながら答える。
発動条件なんかも書いてあるはずのその本には、潜入などというものは書かれておらず、明らかにそれがレアな発展アビリティ、もしくはユニークなものであることを示していた。
故にその効果は未知数。名前からして、非発見率の低下ではないかとアストレアは予想した。
「てことは、このアビリティがある限りカモフラージュ率が上昇するって事か」
「カモフラージュ率……？」
「いやなんでもない。忘れてくれ」
そもそもカモフラージュ率の概念がこの世界にあるか怪しいというのが、非常に惜しいスネークであった。

・・

翌日の早朝。スネークの入団祝いとの事で、星屑の庭では昨夜宴を開かれていた。
他のファミリアと比べても非常に死亡率が高いアストレア・ファミリアは、その神の特異性と役割の持つ危険性から、入団希望者は極わずかであった。
半年前の団員数が３０人くらいだったのに、いまではたったの１１人。昨日入ったスネークを合わせても１２人と、たった半年で半分の団員を失っている。ここまで消耗が激しいファミリアはそうそうない。しかも、直接の原因がダンジョンにはなく、むしろ人間同士での争いによる死亡だから性質が悪い。

闇派閥との闘争というものは、それほどまでに熾烈を極めているのだ。
ガネーシャ・ファミリアも、アストレア・ファミリアの団員減少を見かねて協力を申し出てくれているが、彼らの役目はオラリオの巡回、及び憲兵としての団員の派遣だ。決して闇派閥との戦いのための協力ではなかった。
それは、誰も口にしないだけでオラリオ中の誰もが知っている事だった。
アストレア・ファミリアが血を流して戦っている事も、ギルドはそれを見て見ぬふりをしていることも、他のファミリアは手出しをしたくないという心境な事も、そして、手を貸せば自分たちも標的にされるという事も。
アストレア・ファミリアに入れば、Ｌｖ．１だろうがサポーターだろうが襲われる。だから新人はそうそう入ってこないし、熟練の冒険者でも、よっぽどのお人好しか、変わり者しか入ろうとしないし、そもそも相手の冒険者はよくても、神が改宗させてくれない場合もある。
自分の子を危険に曝させたくないという親心だろう。
だからこそ、ああは言っていたが、ライラも輝夜も心の底では入団者を歓迎していたし、喜んでもいた。
ただ、怖かっただけなのだ。先日闇派閥の罠によって２人の仲間の命が消えた後なだけに、怪しいモノや不確定要素に敏感になっていただけだった。
スネークはその瞳からそれを感じ取っていた。仲間を失くす恐怖を。見えないナニカに対する怯えを。
（仲間を失う恐怖、か）
普段の習慣で早く起きてしまったスネークは、まだ寝ている彼らを起こさぬように、館の外に出た。
向こうの世界からの数少ない持ち込み品の１つ、葉巻とライターを取り出し、火をつけて香りを楽しみながらも、その心は暗く沈んでいた。

自分と同じように、彼らもまた、仲間を失っていたのだ。
共に戦った戦友であり、共に生活をする家族でもある者を失う。奇妙、いや皮肉とでも思える程に、彼らと自分とでは共通点が多いと思えた。
「正義を掲げる者達と、平和では生きられない蛇。それでも、中々どうして共通点が多いもんだ」
「カズ、お前との出会いも中々刺激的だったが、今度は更におかしな関係になりそうだ」
生きているのか、死んでいるのか。それすら分からない戦友に対して思わず声に出したその言葉は、朝霧の中へと消えていった。
その気持ちを共有できる者などいるはずもなく、話す相手もすることも特になかったため、スネークは残っていた装備を点検することにした。
今日はお目付け役のリューにこの街の案内と、ダンジョンへの挑戦を頼んでいたのだ。
「兎に角、スニーキングスーツが無事だったのはありがたい」
最後のミッションで身につけていたスニーキングスーツは、幸いにもまだ着用できるくらいには無事だった。所々小さな穴や傷はあったが、目立った大穴等は見当たらなかった。きっとメディックが庇ってくれた御陰だろう。
最も優秀だった仲間に感謝しつつ、スーツに着替えてその上からTシャツとズボンを履く。少し暑いが、これで街を散策した後にすぐにダンジョンへ行けるだろう。
「お前はまた生き残ったか。ふふ、こう長年一緒にいると、もう折れる気もしないな。愛着が湧く」
次に取り出したのはサバイバルナイフ。長年愛用している1本は、またしても折れず、無くなることもなく彼の傍に居てくれるようだった。
いつの日も自分と共に戦地にいた、命を持たない戦友をベルトに括りつけてある鞘に入れ、再びの共闘を祝う。
「最後にコイツか……」

それは、残った装備の中で唯一の飛び道具だった。『ＷＵ　ＳＩＬＥＮＴ　ＰＩＳＴＯＬ』。
マザーベースで開発がつい先日終わったばかりの最新鋭の麻酔銃で、開発班のスタッフは、アメリカで競技用銃として採用されているルガーＭｋ．２を参考にして開発したと話していた。なんでも、やろうと思えば競技用だと通すこともできるものだとか。
他国へのスパイ活動を視野に開発していたらしく、カズヒラのビジネス展開に対する野望が見えてくる一丁だ。
そんなこの麻酔銃だが、いつもスネークが気にする点であるサプレッサーを内蔵していた。つまり、消音機能が無くなることのないため、射撃時に発砲音に困らないのだ。
サプレッサーが壊れないのは良かったのだが、別の問題もあった。そう、弾の補充だ。
昨夜ライラに聞いたところによると、基本的に冒険者が使うのは剣や槍などの近接装備らしい。それ以外だと弓やボウガン。そして極一部では魔法だ。
この世界では魔法という存在があるからか、それともなければ技術力が足りないからか、銃の存在が非常に希少なようで、聞く限りでは弾の補充は当分不可能らしい。
「どちらにせよ、今まで以上に慎重に使う必要がありそうだ」
輝夜のいた極東には、火薬を利用した飛び道具があるとかないとか言ってたが、それも火縄銃等の古典的なものだろう。
１マガジンと少ししかない弾薬を大切に装填、残りを腰の小さな弾薬袋に仕舞い込み、銃はホルスターに格納する。
こうしてみると、その携帯品の少なさはあの任務を思い出させるものがあった。
自身が初めてスネークと名乗る事となったあの任務。痕跡を残さぬために、持ち込むのはその身と１着の戦闘服。そして一丁のハンドガンとナイフのみ。それ以外の武器弾薬、食料に医薬品等々は現地調達という過酷なサバイバル任務。
ネイキッド・スネークのコードネームを得たあの任務。そして、そ

の直後に行われる『ＢＩＧ　ＢＯＳＳを生み出すための』作戦。
　ある意味では、この世界にこの装備で放り出された自分は、ネイキッド・スネークと言えるのかもしれない。
「いや、裸（ネイキッド）というよりも、傷つい（Wounded）た蛇（Snake）だな。今の俺には、目指すべきものも、意思も、志もない」
「あなたは、元の世界に帰りたいとは思わないのですか」
　自嘲するようなその言葉は、聴く者がいないだろうから言った言葉だった。だからスネークは、突然の人の声に驚き、無意識に麻酔銃をホルスターから引き抜きながら後ろを振り向いた。
　そこに居たのは、敵ではなくリューだった。引き抜いた麻酔銃を下げながら、投げかけられた質問に静かに答えた。
「帰る方法が思いつかない。神が無理なら人ならもっと無理だろう」
「帰りたいと思う以前の問題だ」
「なら、もしも帰る方法があるとしたら」
　なんの他愛のない『もしも』の質問だった。単なる好奇心というには重い質問に、スネークは１度葉巻を口につけ、煙を吐き出してから考えながらに話した。
　紫煙が風に乗って消えた頃になって、やっとスネークは口を開いた。
「どうだろうな。帰りたくないと言えば嘘になる。生き残った仲間がいるかもしれないし、生死が気になる奴もいる。俺を探し回っている奴もいるだろう」
「だが、向こうに戻れば俺は、再び兵士となる以外に生きれないだろう。いや、この世界にいてもそうかもしれない」
「もしかしたら俺は、別の生き方を探すためにここへ送られたのかもしれん。だとしたら、俺は、ここで何を為せばいいかを探すのが先だろうな」
　帰る為にここにいるのではなく、何を為せばいいかを探す為にここにいる。
　そのスネークの考えに、リューはある種の畏敬を抱いた。
　彼女もまた、悩んでいたのだ。正義とはなんなのかを。日々オラリ

オとダンジョンを駆け巡り、闇派閥を討伐せんとするも、仲間は次々と死んでいき、オラリオに平和と安寧をもたらすことは出来ていない。彼女の想う『理想』と『正義』は果たせていない。

「何をなせばいいかを探すために……」

「そうだ。人は皆、何かしらの目標が無いと前に進めないものだ。俺だってそうだ。だから、まずはそれを探す」

この人は強い人なんだと、リューはそう思った。主神アストレアの説く『正義』に共感し、それを実現するために盲信的にこれまで活動してきたリューにとって、それはとても大きな言葉だったのだ。

正義の為に行うのではなく、まずは正義を実現するために何が自分にできるのか、そして、『理想』に近づくためにはどうすればいいのかを探す。

以前からぶつかってきた輝夜からの批判の言葉「理想だけを語る事はできない。いずれ誰もが理想と現実の選択を迫られる」これがいまやっと、少しだけ理解できた気がした。

スネークがここに来たのが、別の生き方を探すためだったのなら、自分がスネークを助けたのは、彼から学ぶためだったのかもしれない。そう感じた。

「スネークさん、理想は、抱いていていいものだと思いますか」

「勿論だ。寧ろ理想はあった方がいい。自分の目指すべき道が見えてくる。だが、形の見えない理想はだめだ。現実味の全くない目標は、かえって明確に目指すものが見えなくする」

「なるほど……ありがとうございます」

リューは心から感謝した。スネークの言葉を聞いて、自分の目指す道がはっきりしたからだ。

アストレア様は、真の正義が何かを知っていた。その思想に感化され、リューはひたすらにそれを追い求めた。

輝夜はそれを『理想』と呼び、『現実』を見ていないと批判した。志を持つ事と、それを実現するのは話が違うと。

アリーゼは理想が実現できるならそれが一番だと言った。ただ、それを実現できるのはほんの一握りの『英雄』だけだと。

ライラはどれも正しいと言った。見る方向によって全ての事柄は真実にも嘘にもなりえると。本当に正しい正義なんて存在しないのだと。

そして、目の前のスネークは、理想は抱くべきだと言った。ただ、現実を一切見ない理想はいけないとも言った。

現実あっての理想であり、理想があるからこそ現実で力をつけられる。

どちらかじゃない。どちらも大切にするべきものだったのだ。

今まではどちらを大切にしたらいいのかとずっと悩んでいた。それをこの目の前の蛇は、ほんの一瞬で解決してくれた。

(理想はアストレア様の掲げる、曇りなき正義。澄んだ空のような、弱い者全てを助けられるような絶対の正義)

(だけど私は今、それを実現できるほど強くない。輝夜の言う通りだ。だから、私は今はひたすらに強くなる。闇派閥に負けない、みんなを助けられるような)

昨夜見た時よりもずっと明るい顔つきになったリューを見て、スネークは葉巻の火を消し、まだ使える事を確認してポーチにしまい込んだ。そして、装備をもう一度確認してからリューに対して呼びかける。

「さて、そろそろ出発と行こうか」

「え、出発ってどこに」

「この街とダンジョンを案内してくれるんだろ？　リオン」

その言葉にリューは、昨日自らの主神と仲間達にけしかけられて、スネークのお目付け役を買ってしまった事を思い出した。だが、今ではもうそのことを後悔してはいなかった。

そして、一度部屋に戻り、自分の装備を取ってくると、時間が早いのにいいのかと一度スネークに聞いた。まだ時間は早朝５時。ギルドは確かに２４時間態勢ではあるが、街はいつもより静かだろう。

「観光するわけじゃないから構わない」

「分かりました。では、行きましょうかスネークさん」

「スネークでいい」

「では、行きましょう。スネーク」
「ああ」
朝日が昇り始める中、二人は星屑の庭を出てオラリオの中心へと向かう。その二つの後ろ姿の後方には、窓からその背中を見つめる彼らの神、アストレアの姿があった。

ａｃｔ　２―１

アストレア・ファミリアの拠点（ホーム）である『星屑の庭』からオラリオの中心『バベル』へは、およそ徒歩２０分。かなり長い道のりだ。その間には、住宅地があり、商業地があり、他のファミリアの拠点がある。

まだ朝早いにも関わらず、アストレア・ファミリアの団員と顔が知れているリューが街を歩いていると、様々な人から挨拶を飛ばされる。

看板を出して開店の準備を進める店員や、朝早く起きた健康志向の住人、そして同業者の冒険者達。その誰もがリューに挨拶をしていた。誰もかもが気さくで友達のように挨拶をし、それにリューも応じるあたり、相当この関係は深いらしい。

「君達は本当に街の人々に慕われているな。昨日、君達の拠点に行く道でもそうだった」

スネークのその感想に、心なしかリューの顔は誇らしげに変化していた。もちろん、横を通過する人々がそれを感じ取れる事はない程、ポーカーフェイスを貫いてはいたが、それでも表情筋の細かい動きをスネークが見逃す事はなかった。

工作兵という職業病であろうその能力で見抜いてしまったスネークは、その天然からか恥ずかしがる事もなくそれを指摘する。

「やけに嬉しそうじゃないか」

「そ、そんな事ないですよ！　あ、ほらあそこにじゃが丸くんがありますから、あれを朝ご飯代わりにしましょう」

自分のポーカーフェイスが見破られた事か、それとも気持ちを読まれた事に驚き、そして恥ずかしかったのか。どちらにせよ恥ずかしがり屋なエルフは、話を逸らそうと行く先にある屋台を指さす。

屋台で売られていたのは、このオラリオの名物料理とも言えるじゃが丸くんだった。ジャガイモに衣をつけて油で揚げたこの料理は、手ごろな価格と豊富な味の種類で人気の商品で、専門店としての屋台がオラリオ中に店を構えていた。

慌てて屋台へと駆け込んだリューは、じゃが丸くんのカレー味を二

人分買うと、紙袋の中の一つをスネークに差し出した。
「これが、じゃが丸くんか？」
見た目はどっちかというと、コロッケのようだった。正直、祖国のフライドポテトやマッシュポテトの方が美味しそうである。が、その衣から香る香ばしいカレーの匂いは食欲をそそった。何より、スネークはリューのいう通り朝飯を食べていなかった。
空腹状態で目の前には食料、そこから導き出される答えをスネークは一つしか持ち合わせていなかった。
一口目は、大きくガブリと噛みつく。衣はこういったジャンクフードとしては珍しく分厚くはなく、それでいて食感を楽しめる程には薄くはなかった。内部のジャガイモはマッシュされておらず、丸ごと揚げられていたのだが、それでいて衣の中でふかし芋のような状態になり硬い食感ではなく、噛めばほぐれる程の柔らかい食感であった。
肝心の味は、ジャガイモ本来の甘味に合わせて衣のカレー味も中々効いており、さながら具沢山のカレーを食しているかのようだった。大人から子供まで食べれるようにカレーは甘口だったが、むしろそれは食べ歩きをするときに辛さを消すための水を探さないでも良いという事を意味してもいた。
総論から言って、じゃが丸くんというのは
「うますぎる！」
「えぇ!?　そんなに驚かなくても」
「オラリオでは、こんなに旨いものがいつも食えるのか？　いや、こいつは気に入った。携帯性も抜群だしな！　携帯食料代わりに持って行ってもいいかもしれん」
「そんなに気に入ったんですか……」
怒涛のべた褒めを目の当たりにしたリューは、スネークのその勢いに若干引きつつも、先ほど本当に自分に説いたり、表情筋で相手の考えている事を読んだりした人物と同一人物なのかを疑った。しかし、残念な事に同一人物であった。
蛇はとても食に対して貪欲であったのだった。それを思い知ったリューは、自分の脳内のメモ帳にそのことをしかと刻み込んだ。

結局あの後、一つでは物足りなかったスネークのために、リューは追加で他の色々な味を４つ買い与え、それをスネークが食しながらバベルへの道を歩く事にした。
その道中にある中堅どころのファミリアの拠点や、ポーションなどの薬品を売っている店などを紹介していったところで、丁度あった一つの看板を目に、リューは肝心な事を思い出した。
「そういえばスネーク、武器と防具を用意していませんでしたね」
ダンジョンに潜る際に必要なものは何か。
度胸？　当然必要だが、もっと現実的なものだ。知識？　それはギルドで嫌というほど叩き込まれる。ポーションなんかのアイテム？
いや、駆け出し冒険者の中には手が出せずにスルーする者もいる。
武器と防具。それは当たり前のように必要だった。いくら神の恩恵があるからといって、素手で倒せるモンスターなんてそう多くはない。結局は武器がないとまともな戦いはできないのだ。
同じ理由で防具も必要だ。「当たらなければ大丈夫」なんて考えを背負っている者は、ダンジョンでは必ずと言っていいほど早死にする。「当たらなければどうということはない」というのは、裏を返せば「当たったら死ぬ」なのだから。理想は「当たってもどうということはない」であり、それが無理だから「当たってもとりあえずは死なないけど、余裕を持って避けよう」とするのである。
どちらも重要。他のモノがいらないというわけではなく、この二つは特に必須である。事実、ギルドで駆け出し冒険者向けの斡旋を行っているのだから、その重要度は計り知れない。
だが、この蛇はどうだ？
「いや、別に大丈夫だろう。このスーツにナイフ、それに緊急用の麻酔銃。なんの心配もない」
「大アリですよ。はぁ、もうすぐ歩けばバベルですね。ギルド行く前に……こっち来てください」
そう言ってリューが連れ込んだのは、このオラリオで最も有名な大手鍛冶師系ファミリア「ヘファイストス・ファミリア」の経営する店だった。バベルの八階にあるこのテナントは、一流の鍛冶職人が作っ

た第一線級武器だけではなく、未だ幹部に認められていない、半人前の鍛冶師達の武具も販売されていた。
そこへ連れてきたリューは、「駆け出しの冒険者」としての武器や防具を取り繕おうとしたのだが
「別に買わなくても良いだろう」
スネークはその一点張りだった。彼にとっては、大きな得物も機動性を妨げる防具も不要だったのだ。結局１０分間勧め続けても別にいいという意見を変えないスネークに対し、リューは「一度行けば分かる」という気持ちを固め、普段よりも二本ほど多くポーションを使う覚悟でダンジョンに潜る事にした。
ヘファイストス・ファミリアの店を後にし、そのままギルドへ向かうと、リューは自分の担当をしているエルフの受付嬢に登録願いの話を持ち込むと、スネークに書類を書くように促した。
「ここに名前。で、ここにファミリア名。歳とか生まれも書くんだけど……」
「この世界にはアメリカはないんだろう？」
「ええ、もちろん」
「むう……」
結局本当の事など書くこともできず、妥協して適当な村を書いておいた。ポーションの一種に使う薬草の生産地ではあるが、オラリオからかなり遠方の地で、そうそう確認を取る事もないだろうという話によるものだった。
名前はやはりスネークのみ。そういったものは深く入り込まないのが冒険者の掟でもある。
その他どうしようもない事を適当に並べ立てると、「講習会」という名の地獄の叩き込みにスネークは連れていかれてしまった。通常の受付嬢なら長くて数十分で済むダンジョンについての講義だが、リューを担当する受付嬢はこの講義が死ぬほど長い事でオラリオでも有名なのだ。
最終的にスネークがリューのもとに帰ってこれたのは、講義が始まってから約２時間後の事であった。これは、リューが見た中で最も

長い講義であったが、どうもそれは途中でスネークが居眠りをしたことが原因らしい。
それを聞いたリューは
「居眠りなんて……度し難いですね」
と言いつつ、ダンジョンへとスネークを案内した。

◇

ダンジョンといえば真っ暗闇の洞窟を松明片手に進むイメージがあるが、このダンジョンはそんな事はない。むしろ地上と変わらず明るい。
スネークもその光景には舌を巻いた。魔石と呼ばれるダンジョン由来の素材が、ダンジョンではライトのように機能していたのだが、それが蛍光灯のような様だったからだ。
「話には聞いていたが、ここまで明るいとはな」
「暗い場所ももちろんありますが、当分その心配はないと思います。上層ではそんなのごく1部分ですし」
「さて、そんな事よりモンスターを見つけてみましょうか」
この1層にいるのは、主にゴブリンとコボルト。どちらも冒険者基準では非常に弱い部類で、駆け出しの冒険者が最初に倒すモンスターは大抵このどちらかだ。
そして、モンスターはダンジョン内である限り何処にでも湧き出てくる。文字通りである。
ダンジョンの壁からモンスターは生まれ落ちるのだ。それは、小さなアルミラージも大きなミノタウロスも変わらない。
スネークはナイフを左逆手に持ち、右手はフリーなままで探索を開始する。が、その探索はリューからすれば奇妙とすら言えるものだった。
常に足音を立てないように気をつけ、周囲の警戒は怠らない。そして何より特徴的だったのは、その気配の無さだ。
殺気を常に纏う者は少なくない。近寄り難い強者を醸し出す者は、

非常に多い。だが、この男は、スネークはなんだ。まるで自らを周囲と一体化させるかの如き振る舞いをする。
ダンジョンが生きているという話があるが、スネークはそれに合わせるが如く呼吸を行い、自らに備わる気配という気配を押し殺している。目の前に居るはずのリューですら、一瞬目を離せば彼を失ってしまうだろう。
いったい、これまで誰がこのような探索を行っただろうか。小心者な駆け出し冒険者でも、ここまで警戒して歩みはしないだろう。
「あの、スネーク……」
「シッ！　見つけたぞリオン。あれがゴブリンだな」
曲がり角で隠れつつ、その先にいるものをスネークは発見する。その数３。
緑色の肉体に、人間の子供くらいの大きさの身体を持つ矮小で醜いモンスター。それは誰もが知るゴブリンの姿そのままであった。
「ええ、間違いない」
「そうか、なら待ってろ」
それがゴブリンなのかだけ確認すると、スネークは気配を殺したままゴブリンに近づいていく。
曲がり角からゴブリンまでの距離はおよそ３０ｍだ。そこからどんどん短くなる距離に、リューは気が気でなかった。なにしろ彼の得物はナイフ１本。防具は無し。奇襲に失敗すればどうなるか。
いつでも助けに行く心を固めていたリューだが、その不安はすぐに杞憂に変わった。
まず一体目のゴブリンを右手で腰を抱え込むように掴みとって身動きを止め、そして鳴き声を出される前に左手に握ったナイフで首を引き裂いた。いかに魔石が核のモンスターでも、首を取られればその活動は停止するのだ。
次の二体目は一体目が死んだのを直感で察したのか、スネークの方を素早く向いた。が、それは一体目の死体を投げつけたスネークによって、仲間の死体の下敷きにされ動きを制止された。その隙に三体目の頭を鷲掴みにし、力強く床に叩きつけた。冒険者の力に耐えきれ

なかったのか、その頭から脳漿に相当するであろうものがまき散らされ、返り血でスネークの装備が汚れるが、それに構わず下敷きになったままだった二体目のゴブリンにトドメを刺した。
　１０秒とかからず三体のゴブリンを片付けたスネークは、周囲に他のモンスターがいない事を確認すると、そのままナイフで魔石を取り出す作業に移行した。
　手慣れた手つきだった。まるで、このような『動作』を何度も何度も繰り返してきたかのような。しかし、どこかその表情はやりづらいとでも言うような顔つきでもあった。まるで、これでは小さすぎるとでも言うように。
　そんな考えを巡らせるリューに気付いたのか、スネークはリューの名前を呼び、呼び寄せた。
「これが魔石でいいのか？」
　そう言って、ナイフでゴブリンの胸から小さな光る石を取り出すと、スネークはリューにそう問う。首を縦に振って肯定を示すと、満足気に魔石を腰の大きめのポーチにそれを仕舞い、更に解体しようとナイフを手に持った。が、それは叶わない。モンスターは核となる魔石が無くなれば灰になるのみなのだ。
　消えていくゴブリンを何処か悲し気に見つめていたスネークは、残りのゴブリンの魔石を引き抜きながらリューに話しかけた。
「どうだ、ここの狩りとは少しばかり違うだろう」
「ええ、それもだいぶ。でも、あなたは速い。行動も、判断も、そして技も。セーブされているとしてもレベル１とは、とてもじゃないが思えない」
「悪いがこれは本来怪物退治のためのものじゃない。人型以外の対応はやってみるしかない」
「……なるほど、対人用のものだったんですね」
　スネークは確かにモンスターと戦った事もある。火球を吐き出し、空を悠々と飛び回る飛竜や、鋭い爪や狂暴な牙を武器に暴れ回る竜などを。ある意味では巨大兵器の数々もモンスターと呼べるだろう。
　だが、それは銃あっての戦闘だ。結局このナイフと手では人としか

やりあった事がないのだから、それ以外の人型でないモンスターと出会ったら、行き当たりばったりでやるしかない。それでもダンジョンに入る前に武器の調達を断ったのは、このナイフがあったからであり、そしてこの一本でどこまでできるのか確かめる必要があったからだ。

「それがどこまで通用するのか知りたいからな。悪いが今日は、こいつ一本でどこまでできるのか分かるまでやらせてもらう」

凄まじいプロ精神だった。ここまで真面目にダンジョンに潜っている人を久しぶりにリューは目にした。もちろん、中層や深層に向かう者達を馬鹿にしている訳ではないが、ここは上層。誰しもが容易に攻略できると分かっている。それは、初めてダンジョンに潜る冒険者も例外ではない。

だからこそ、この男の全てにおいて完璧にしようとする精神が非常に素晴らしいと思えたのだ。

間合いの把握、モンスターの平均的な体格と大きさ、どのくらいの攻撃をすれば相手が倒れるのか。逆に自分の身体でどれだけ耐えれるのか。その全てをスネークは理解しようとしていた。

そして、そういった実験と実践を繰り返すうちに、とうとう二人は１２層目まで来てしまっていた。５層から出現する初心者殺しのウォーシャドウやキラーアントを問題にもせず、その数が増えてもリューの援護を必要とすらしなかった。

それにしても狂気的な進軍速度だ。上層のマップを頭に叩き込んであるリューがいるとしても、たったの数時間でＬｖ．１の冒険者が、まともに戦闘を１人で行いながら１２層まで来るのは異常だ。

それを実現しているのは、スネークの持つ卓越した戦闘センスだろう。あれほど自分で心配していた人型以外の相手も、即座に対応できていた。

１２層から１３層へと下る階段に到達した時、リューは口を開く。

「今日はもう十分です。きりがいいですし帰りませんか？」

次の階層からは、ここと全く違う地域『中層』である事を知っているリューは、昼すぎということもあり帰還を促す。

だが、スネークはそれに首を縦に振らなかった。
「いや、中層に踏み入れてみたい」
今度ばかりはさすがのリューも唖然とした。
Ｌｖ．１の冒険者では、相手をする事すら困難、いや不可能とすら言われるモンスターすらいるのが中層なのだ。
それに踏み入れてみたい？　いくらなんでも無茶ではないか。そう思ったが、しかしリューの持つ１つの持論がその考えを飛び越した。
「冒険しなければ前には進めない、ですか。いいでしょう。ですが、次の階層までですからね」
冒険者は冒険してはいけない。ギルドの推奨するその掟を無視した、蛇の初陣が始まる。

ａｃｔ　２―２

１３層。そこは一つ上の階とは全てが異なる場所。敵の強さも、ギミックも、そして要求される技術も物資の量も。

ここから先は、そう易々とは進ませない。そうダンジョンが告げるのが、この中層と呼ばれる階層群の一番上の１３層である。あるはずなのだが。

「見つけたぞ。前方距離４０に鎧鼠（アルマジロ）。孤立している」

「ハードアーマードですか……物理攻撃は相性が最悪ですよ」

「なに、盾にも穴はあるさ」

蛇はエルフの助言を軽く流し、得物のナイフを左手に握りしめて巨大な球体状のモンスターに静かに近づく。その歩みは無音でありながら決して遅い訳ではなく、瞬く間に距離は縮まった。

そして、彼我の距離が５ｍ程になった時、蛇は鎧鼠へと飛びついた。彼が狙うはアルマジロが丸まる時にできる鎧と鎧の関節部。ここなら確かに手持ちの武器でも攻撃が通る。

だが狩られる側も黙ってはいない。飛びつかれた事に驚いた事による本能か、それとも元々そういう魂胆か、ハードアーマードは背中に乗った蛇を振り落とそうと必死になって暴れ回る。それによって狙いがずれた蛇は、ナイフを甲羅に刺してしまう。文字通りの鉄壁を誇るその鎧は、蛇の得物のナイフの刃を受け付けない。

鋭く耳に刺さる金属音。衝撃とその堅牢さに左腕が痺れるが、ハードアーマードにしがみつくその右手は未だ離れてはいない。まだ蛇のターンだ。

しかし彼はすぐに再びの攻撃を仕掛けなかった。これ以上無駄な攻撃をする事で得物を失いたくはなかったのだ。モンスターと言えど、そのスタミナは無限じゃない。この鼠が暴れるのをやめるタイミングを待ち、それから確実に刺突する気だ。

そもそもハードアーマードの攻撃方法からして、それは非常に危険な賭けではあったが、しかしそれは現状の装備で仕留めるには非常に有効な策ではあった。

アルマジロが転がるのが先か、蛇の待つタイミングが先か。賭けに勝ったのは蛇だった。
一瞬だ。一呼吸というその一瞬だけハードアーマードはその動きを停止した。しかしその一瞬すら蛇には十分すぎる時間だ。
「ここだぁ！」
突き刺したナイフは、今度はしっかりと関節部に突き刺さり、刀身が見えなくなるまで深々とその刃をアルマジロの身に沈めた。
さっきまで振り落とすために暴れていたハードアーマードは、今度は深々と刺さった刃の痛みに暴れ始め、流石にまずいと思ったのか蛇は背中から降りる。その際も、ナイフを引き抜きながら切り裂くのを忘れずに。
関節部には動脈でも通っていたのだろうか。ナイフを引き抜いた途端に血液が噴水のように噴出し始め、その痛みで余計に隙ができたのを蛇は見逃さない。
ハードアーマードの正面に回り込み、その脚部に向けて足払いを繰り出す。そしてバランスを崩したその胴体に向けてナイフを構えれば、ハードアーマードは丁度良く倒れてくる。
まるで抱きかかえるかのような恰好になって、前のめりに倒れるハードアーマードの胸には、蛇の構えるナイフが突き刺さっている。自重で更に深くなる傷にたまらず顔を顰めた鎧鼠だが、時すでに遅し。蛇は最後の一撃を放つ。
「沈めぇぇ！」
突き刺さったままナイフを横に切り裂き、その身を切り裂く。人の大動脈の欠損以上のおびただしい程の血が流れ、蛇の身体を赤黒く染める。それと同時にハードアーマードの命の灯も消え、ナイフと蛇という支えを失い地に伏せる。
完全に動かなくなった鎧鼠を見た蛇は、魔石を回収するためにハードアーマードの身体を仰向けに向けなおし、奥の角で待機していたエルフを呼び寄せながら魔石を剥ぎ取るためにハードアーマードを解体する。
淡々と解体作業を行う姿を見てエルフは感心したのか、それとも驚

いたか。その顔は普段の冷静という言葉を具現化したようなものではなくなっていた。
「スネーク、流石ですね。一体だけだったとはいえ、ハードアーマードをナイフ一本で討伐なんて」
「意外といけるもんだ。だが、こいつの硬さは厄介だな」
「本来は転がってくるんですよ。まさかそれをさせないとは思いませんでしたが」
ハードアーマードは上層１１層あたりから出始めるモンスター。上層では最も高い物理防御力を誇る甲羅の鎧は、文字通り鉄壁であり、中層へ挑戦する冒険者の防具や盾にその素材が使われる程にその堅牢さには定評がある。
しかし、ハードアーマードの強さはその鎧が全てではない。彼らの攻撃方法はいたって単純。丸まった状態での高速回転突進だ。シンプルにして非常に強力。この状態になれば生半可な攻撃は通さず、少しでも迷いの含んだ防御をすればＬｖ．２冒険者の防御も簡単に打ち砕く。むしろそれ以外の攻撃をしてきた事の方が稀な程だ。
だが蛇は、スネークはそれを許さなかった。一体だけだからというのもあっただろうが、殆ど無傷で相手しきったと言っていいだろう。ちなみに、殆どと言ったのは最後に寄りかかってきたハードアーマードの重さで首が凝ったからだ。
「どんなに強力な装甲を持った者にも、どこかしらに弱点はあるものだ」
「ギルドの担当官（アドバイザー）の助言ですか？」
「いや、知り合いの技術者（エンジニア）が言っていた。どんなに強力なものでも、弱点がないと可愛げが無いとな」
その言葉を聞いて、少なくとも弱点があったとしてもハードアーマードは可愛げがあるとは言えないとリューは思ったが、それはスネークも同じようだった。自分で言った言葉と目の前モンスターを見比べては首をかしげていた。
無事魔石を取り終えるまで、リューは周りを警戒しているつもりだったが、彼女の嗅覚と視覚、聴覚よりもスネークのそれらの方が鋭

かったようで、ダンジョン内の細かな異変を感じ取った。
「おい、リオン。何か聞こえないか？」
「何かですか？」
それは普通の人間なら聞こえる事もないだろう〝声〟だ。神の恩恵を受けた者達ですら、その声を聴くことは難しい。ダンジョンと心を合わせ、気配を一体化させたスネークだからこそ聴くことができた。
（モンスターの鳴き声か？　この鳴き声はアルミラージか。それにヘルハウンドが炎を吐く音も聞こえる。何かが地面を転がる音は……ハードアーマードか。それに冒険者らしき人の声も混じっている）
「スネーク？」
「リオン、この階層でなすりつけはどのくらい行われる!?」
考え込むスネークを怪しみ、リューは問いかけるが、逆にスネークに質問される。そのスネークの様子は、ここまでで見たこともないくらいに切羽詰まった様子で、問いかけの外から「早く答えろ」と言っているのと同じだった。
スネークの口から出てきた『なすりつけ』という言葉に、リューの脳内に浮かんだのは一つの恐ろしく、そして合理的なダンジョン内で生き残るための術。
怪物進呈（パス・パレード）。他のパーティーに自分達のモンスターをなすりつける行為。稀に他パーティーのモンスターを奪う場合も同じ名前を使う事がある。その行為は文字通り危険なもので、進呈先の練度によっては全滅の原因にもなりかねないものだ。
もちろんギルドは非推奨としているが、ダンジョン内では基本仲間と自分が最優先。自分の仲間を守るために他人を犠牲にするこの方策は別に珍しいものでもなかった。
特にここは上層と中層の中間地帯。上層では通用したパーティーが、新たに出現するモンスターに対応しきれずに逃げ回っていたところをたまたま通った別のパーティーに押し付けるなんて行為は、残念ながら非常に多い。
その状況を幾つも目にし、危険状態にあるパーティーに幾度も助け

に入った事のあるアストレア・ファミリアのリューだからこそ知っている事であった。
「怪物進呈（パス・パレード）ですか！　……この階層ではかなりの数が」
「なら俺たちは、そのなすりつけられる側になるようだ」
　音は時間が経つごとに大きくなり、少しづつリューでも聞こえる音量へと変わっていく。
　ドタバタとした足音が聞こえ、その足音の主達が悲鳴を上げながらこちらへ走ってくるのが聞こえる。いや、既に見え始めている。
　スネークがぱっと見で発見できただけでも、ヘルハウンド４頭、アルミラージ８匹、ハードアーマード３体。錚々たるメンバーだったが、それを見てゾっとしていたのは、むしろリューの方であった。
「なんて量だ」
「どうする？　隠れて見て見ぬふりもできるが」
「……助けたい。本当なら助けたいが」
「どうした」
「あの量はとてもじゃないが、私とあなただけでは捌ききれない」
　例えＬｖ．４の冒険者であろうとも、ヘルハウンドの一斉放火は耐えきれない。ハードアーマードの鎧は先ほどのように余裕を持って狙っている暇がない。アルミラージもあの量は捌くのに手間取るだろう。
　せめて、せめてアリーゼか輝夜、ライラの誰かがいたら。もう一人いれば怪物進呈を受け入れる事ができたかもしれない。それでも厳しいのに、今二人で迎え撃つのは絶望的だ。
　これまでたまたま一人の時にこういった場に遭遇してこなかったからこそ、気が付かなかった。
（輝夜の言っていた『見捨てる必要』とはこういった事なのか）
　リューの目には、悔し涙とも悲し涙とも見れる大粒の雫が浮かんでいた。が、隣のスネークはこの状況に全く動じていなかった。そして、悲観的でもなかった。
「で、リオン。助けるのか、助けないのか。いや、助けたいのか、助けたくないのか。どっちだ」

「そんなの、そんなの助けたいに決まってる！」
「なら助けようじゃないか」
「え？」
　助けたくても助けられない。そう思っていたリューの声に比べ、男の声はやけに明るかった。そのトーンは違っているが、声の雰囲気は確かに、確かに彼女の良く知る赤髪の女性に良く似ていた。
　この人は、あれを見ても諦めていないのか！
　驚くと共に、リューは感謝した。スネークのこれまでの行動を見ていれば分かる。きっと隠れようと思えば、本当に隠れてやり過ごす事もできただろう。もちろん、リューも含めてだ。
　それなのにも関わらず、彼は危険な賭けにもなる人助けを嫌とも言わずに受け入れてくれたのだ。むしろ、この選択をリューがとるのかどうかを試すかのように。
「人助けをするのは、雇い主（アストレア）からの要望だ。無視するわけにもいかないだろう？」
　そう言い放ったスネークの顔は、彼が自分の事を話す時に良く言う「人殺しの顔」にはとても見えなかった。むしろ、人助けをする事を喜んでいるようにも見えたのだ。
　彼はリューにロープを貰うと、ダンジョンの地面スレスレにまるで鳴子のようにそれを設置し、走ってくる冒険者に向けて大声で叫んだ。
「お前ら！　死にたくなければ、こっちへ走ってこのロープを飛び越せ！」
　それを聞いた冒険者たちは、希望を見出したかのような顔になった。それは、スネークの言葉を聞いたからか。それとも横にいたリューの姿を見たからか。どちらにせよ涙と鼻水で塗れていた顔は途端に明るくなり、先ほどまでの絶望を加工して作ったような表情が今度は希望の光で照らされる。
　そして、彼らがロープを飛び越したのを確認すると同時に、スネークはロープの片側を持ってそれを持ち上げた。
　地面を走っているアルミラージとヘルハウンドは足を引っかけて

コケてしまった。
「リオン！」
スネークの合図と共に駆け出したリューの目標は、ロープにコケて倒れたヘルハウンドとアルミラージ。ではなく、こちらに向けて高速で転がってくる3体のハードアーマードだ。大型かつ高速の物体を受け止められる程ロープは強靭でないから、そのための作戦だ。
決意を決めたリューは、大量のヘルハウンドとアルミラージを飛び越して、向かってくるアルマジロに相対する。
だが、Ｌｖ．４のステイタスを持ってしても転がるハードアーマードの装甲を貫通する攻撃を行うのは難しい。特に物理攻撃では尚更だ。魔法を使えば別なのだが、詠唱している暇がない今は使っている時間はない。
そのため彼女は倒す方向ではなく、止める方法を選んだ。
ダンジョンはただの一本道というわけでも、内部がただの道だけなどというわけではない。普通に湖もあれば、木も花もある。そして勿論、それらを利用するモンスターもいるわけだ。俗に言う迷宮の武器庫（ランドフォーム）だが、それは上手く使えば冒険者にとってもプラスに働く。
リューが利用したのは、ミノタウロスも使う大木。これをハードアーマードが通る直前、タイミングよく切り倒す事で防ぐ算段だったわけだ。
（止まってくれ！）
道を塞ぐ程の大木は、ハードアーマードがぶつかった瞬間に表面の皮が剥がれ、木屑も大量にまき散らされたものの、完全に破壊される事も、彼らが突破することもなかった。
それを確認しつつスネークは、リューに言われた通りにヘルハウンドの首を掻っ切る事で先に仕留め、それからアルミラージにかかっていた。が、中々すばしっこいウサギ達は、スネークでも捕まえるのを手間取っていた。
見かねたリューが手助けをしようと思っていると、スネークは得物のナイフを仕舞い、手でアルミラージを捕まえ始めた。そして、二匹

捕まえてその耳同士をロープで縛り、動けないようにすると、それを先に倒してしまった3匹を除いた3組を瞬く間に作ってしまった。
あまりの早業に目を奪われたが、それどころじゃない事に気が付く。新しい足音が聞こえるのに二人は気づいたのだ。
大木のバリケードの奥にいるハードアーマードの音ではない。もっと大きな、重厚感のある足音だ。そしてリューはこの足音の主を良く知っている。
ソレはすぐに姿を現した。バリケードを突破しようと試行錯誤している鎧鼠の群れをなぎ倒し、そして簡単にそのバリケードを破って。いや、そのバリケードを自然の武器（ネイチャーウェポン）へと変貌させて。
「ミノタウロス……」
リューはその姿を見て思わず声を漏らす。
中層、とりわけ17階層までのモンスターの中では最高位の強さを誇る、半人半牛の姿を持つモンスターだ。その強さはギルドのお墨付きで、推定レベルはＬｖ．２。単独での強さはこれまでの他のモンスターの追従を許さない。
強靭な肉体、ダンジョン内の物資を利用して天然武器（ネイチャーウェポン）すら使う知能、Ｌｖ．１とは比べるのもおこがましいレベルの総合力。Ｌｖ．４のリューなら余裕で倒せるだろうが、万が一Ｌｖ．１のスネークが巻き込まれれば、防御ができずに一撃で致命傷を貰う可能性すらある。
（厄介な）
そう思ったのも束の間、リューの前にスネークが躍り出る。
なんと彼はＬｖ．１でミノタウロスに立ち向かおうとしているのだ。流石に止めようとしたが、それをスネークは片手で制止する。彼は本気だった。
尊敬を通り越して呆れる彼女に背を向けて、彼は怪物に立ち向かう。
「リオン、今夜はスキヤキだぞ」
不穏な言葉を言いながら

ａｃｔ　２―３

ミノタウロス。それは第二級冒険者の登竜門とも呼ばれるモンスター。

殆どの冒険者が初めて遭遇する、ギルドにＬｖ．２指定されているモンスターでもある。

なぜそのような評価をされているかと言えば、上層で培ってきた全ての知識と能力を要求されるからだ。

蜥蜴男（リザードマン）等から始まる天然武器（ネイチャーウェポン）の使用。ハードアーマードに代表される強靭かつ強力な肉体装甲。ウォーシャドウが備える冒険者との駆け引き。

それらの総復習であると共に、更なる一歩目というのがこのミノタウロスなのであり、同時にその難易度から中層に入りたての冒険者からは恐れられてもいる。

並の冒険者ならその風貌に恐怖心を抱くだろう。

そう、並の冒険者なら。

スネークは違った。

（見事な牛だ。ステーキにするのもいいが、どうせならアレを食ってみたいな）

そう、彼がミノタウロスを見て抱いたのは、恐怖ではなく食欲だった。

常人ならそもそもモンスターを食事にしようなど考えもしないだろうが、この男、過去には毒キノコを『食ったら美味しいかもしれない』と言って食したり、核実験の影響を受けた可能性が十分にある動植物を平気で生でかぶりついたり、寄生虫の恐れすら『噛めば死ぬ』の精神で生きてきたのだ。むしろ牛の見た目をしているミノタウロスはご馳走に見えたに違いない。

食欲の為なら惜しみなく力を振るうスネークは、ミノタウロスを今にも木っ端微塵にしそうな勢いのリューを片手で制す。もちろん、大事な食材の為だ。

今日だけでも相当に酷使しているナイフを構え、自分の２倍はあり

そうな相手に対峙する。
ゴブリンやコボルト、リザードマン等に通じたＣＱＣも、これだけの体格差があるミノタウロスには通用しないだろう。技を力で押し潰される。
だからこそ、今最も信用できる武器はこのナイフ１本。折れるなんて心配はしていなかった。
最初に仕掛けたのはミノタウロス。持ち前の高ステイタスを活かした俊敏な攻撃。
右手に持った石斧を思いきり振り下ろし、スネークの頭をかち割ろうとする。しかし、蛇には当たらない。
スネークは大きな予備動作から繰り出すこの攻撃を見切っていた。動きは確かに速い。速いが、それは結局ゴブリンやアルミラージと比べたらというくらいのものだ。スネークにとって大した速さとは言えなかった。
飛行するムササビをナイフで捕らえる事すら可能な彼からすれば、その一撃は蝿が止まるという言葉が相応しいものにすぎない。縦の振り下ろしを体をひねることで紙一重で避けると、お返しとばかりにナイフで赤色の腕を斬りつける。しかし、その手に返ってきたのは手ごたえではなかった。
流石に第二級冒険者が硬いと評すだけはある。その肉体は伊達ではなかった。人間と比べるのがおこがましく感じるほどに分厚い筋肉繊維は、それを斬る者にまるで堅牢かつ柔軟なゴムを割いているような感触を与えるだけでなく、半端な刃の侵入を許さない。
そしてその半端な刃という評価は、スネークのナイフにもつけられたようだ。
「っ馬鹿な！」
アメリカ軍で制式採用されているサバイバルナイフは、この異世界において十分な装備とは言えなかったらしい。その鉄の刃による斬撃は、ミノタウロスの皮膚を僅かに裂く以上の攻撃とはならなかった。
元々推奨レベルに達していないスネークは、さながら岩を斬りつけ

ているように感じたことだろう。その感覚を知って初めて彼はリューの言っていた意味が分かった。
（確かに、武器を貰っておくべきだったか）
そんな事を今悔いてもしょうがないと割り切り、どうにか突破する方法を模索する。
狙うならどこだ？　攻撃を終わらせる腕か？　移動を阻害するために脚か？　それとも、いや、決まっている。
（こいつは仕留める）
スネークはあくまでもミノタウロスを仕留めるつもりだ。それを崩さない以上、狙うのは一か所のみ。首だ。
別に完全に攻撃が通らないわけじゃない。限りなく少ないダメージに抑えられているだけだ。なら限りなく同じ場所を何度も斬りつければ、いずれ刃はその肉を断つ。
狙いを絞った蛇は、半牛から距離を取った。彼の持つ得物の特性上、距離を取るのは悪手のように見えるがそうではない。この行動で彼が狙うのは、攻撃ではなく回避だ。
距離を取られたミノタウロスが行うのは、対近距離の小振り攻撃ではなく、最初の一発と同じ力一杯の大振り。その予想は見事に的中する。左手に持ったバリケード製の木槍による突きが小さな人間に向けて放たれ、それに呼応するようにスネークは強化された脚力を最大限に活用して跳躍を行う。
槍は肉塊を作る事はできず、ただ空気を切り裂いただけに終わる。そして跳躍したスネークは槍を踏み台とする形で加速する。その身を一閃の弾丸のように見立て、ミノタウロスの肩上を通過する。すれ違いざまに首筋に斬りかかりつつだ。
『ヴゥヴォッ!?』
その素早さはレベル差を感じさせない。ミノタウロスの回避行動を許さなかったそのナイフだが、やはり火力が足りない。薄皮が切れた程度だ。
だが、もう驚く事すらないスネークは、淡々と次の一撃に向けての準備を続ける。

同じ相手に二度同じ行動が通用しないという事をスネークは知っている。だからこそ、いくつ必要になるか分からない手段を数え切れないほど引き出しから取り出して思考する。
対するミノタウロスは、ことごとく外れる攻撃にイラついたのか、元々狂暴だというのに、更に攻撃的な姿勢に変化していた。スネークに考える時間を与えないと言外に告げるように、乱暴に石斧を振り回し、槍を無作為に突き出す。それはスネークにとって良いとは言えない状況だった。
小刻みの攻撃ほど反撃は難しい。カウンターは相手の大振りを狙うのが基本であり最も有効な手段でもある。
だからこそ、この状況で彼が導き出した答えは
攻めることだった。
石斧の横振りを屈んで避け、槍の突きをローリングですり抜け、もう一度来る斧を今度はジャンプで躱し、タイミングを合わせてミノタウロスの腕に着地、すぐに再びの跳躍で首を斬りつける。先程の斬撃で裂いた皮の上を寸分違わずに沿い滑らせるように斬る事い成功し、とうとうミノタウロスから赤色の液体が流れ始める。
攻撃が効いている事を示す明確な合図に思わずスネークは半笑いし、逆にミノタウロスはその顔を驚愕と痛みで怒りに歪ませる。
『フウッ……ヴオオオオオオ!』
赤から血の色に変わった自らの外皮を見たミノタウロスは、鼓膜を破かんばかりの怒声を鳴り響かせ、スネークをその場に釘付けにしようとするが、直接的な攻撃だけではなく、音による攻撃すらスネークには通用しない。
ベトナム戦争を潜り抜け、数多の戦場を生き延びた兵士である彼にとって、戦車の砲声にすら負ける音では静止させる材料にはならない。
耳を塞ぐ事すらせずに懐に潜り込み、力の限りを尽くして半牛の左足を蹴りつける。
バランスを崩したミノタウロスは、倒れる事こそしなかったが、その片膝を地に落とすことになった。

この状況を狙っていた蛇は、この戦闘初の大振りでの攻撃を仕掛ける。それは今までの斬撃とは一線を画す攻撃。突きだった。
うっすらと見える首の傷口に鉄の刃を突き立て、奥へと差し込む。それだけでは完全に埋まらなかったため、更にスネークは、拳を握りしめ、ナイフの柄を思いきり叩いた。釘のようにナイフはその刀身をミノタウロスの首に突き刺さった。
人間なら数回は死んでいる一連の攻撃だった。スネークも手ごたえを感じたが、それは一種の慢心を生んだ。奴はそんなに柔な身体の作りをしていないのだ。それでは死ななかった。
『ウヴォオオオッ！』
「ぐあっ！」
ミノタウロスは痛みに必死に耐え、さながら鬼のような形相になりながらも思わず槍を手放した左手でスネークを吹き飛ばした。
火事場の馬鹿力と生来の怪力によるそれは、素手だったといえど大人の人間が軽々と宙を舞う程に強力だった。それを空中で姿勢制御をしつつ着地し、四肢をフル活用してしっかりと戦闘態勢に戻る事ができたのを見れば、流石スネークだと言わざるを得ない。
首にナイフが刺さった状態でミノタウロスは再び立ち上がり、右手の石斧を得物にゆったりと蛇の方へと向かってくる。
スネークはスネークでさっきの衝撃で右肩が脱臼しているのを確認し、力と技をもって自力で元に戻してから立ち上がる。
双方ともに傷を受けたこの状況。しかし有利なのはミノタウロスだった。なにしろスネークの唯一無二の得物だったナイフは、ミノタウロスの首に刺さったままなのだから。
それが分かっているのだろうか。確認するまでもなくミノタウロスの攻勢は再び始まり、それにスネークは防衛に手一杯になっていた。武器がなければさしものスネークにもお手上げだった。
だがそれは、スネーク一人であったならの話。ここまではスネークの言う通りに見物に徹してたリューが、懐に入れておいた一振りのナイフを取り出す。無駄な装飾がいっさいない、飾り気のない銀のナイフだが、その刀身は磨き上げられており、鏡面のように眩い光を纏っ

ていた。
鞘から引き抜いたその短刀を持ち、蛇に向かって大声で叫ぶ。
「この大馬鹿！　受け取りなさい！」
リューは叫びながらナイフをスネークに向かって投げつけた。それを見たスネークは、半歩下がり、右腕の後ろに伸ばしてキャッチしようと試みる。
だが同時にミノタウロスも攻撃を仕掛けていた。石斧による容赦のない一撃。再びの脳天狙いの一撃。
ナイフを握るのが先か。それとも石斧が振り下ろされるのが先か。一瞬を争う状況が生み出され、ミノタウロスの腕が下がった時、その音は発せられた。
ズシリという何かが落ちた音。
思わず目を瞑っていたリューがその瞳を開くと、そこにあったのは生首ではなく真っ二つにされた石斧だった。
飾り気のない銀のナイフは、その刀身に宿す確かな切れ味を遺憾なく発揮し、ダンジョンによって生み出された自然武器の斧を使い物にならないガラクタに変貌させた。その結果は実際スネークが一番驚いていたが、彼はそれを顔に出す事だけはせずに再びの攻撃態勢を取る。
今度はミノタウロスが武器を失った。形勢逆転である。
慌てて落としていた槍を拾おうとしたミノタウロスに向かって、スネークは駆け出し、その股下をスライディングで抜けつつ、両足のアキレス腱部分を切断した。バチンという音と半人半牛の怪物のうめき声がダンジョンに響くが、まだスネークの攻撃は止まらない。
アキレス腱への攻撃が有効なのを知ったスネークは、容赦なく人間にとっての急所への攻撃を仕掛ける。
関節や骨をも簡単に銀のナイフは断ち切り、あの分厚いゴムのような筋肉装甲をまるでバターのように楽々と切り裂く。
先ほどまでは首に一筋の血が流れるだけだったのに、今やその身体は血に汚れていないところが見当たらない。それだけスネークの狙う部位は有効な部位だったのだ。

「終わりだぁ！」
十分な血が流れたのを確認したスネークは、首元目がけて横一文字に一閃。ミノタウロスの頭と胴体を分断した。
いかに彼らが怪物だとしても、頭と体が別々になって生きていけるものは少ない。その大多数の方に属しているミノタウロスは、ついにその息を引き取った。
数分間という短い時間での死闘は、しかしスネークを疲れさせるには十分な程に過酷で、熾烈なものであった。葉巻を小さなポーチから取り出し、口に加えながらダンジョンの壁に寄りかかって休憩を取る。
「まったく……だから武器を買っておこうと言ったんです」
呆れた表情を浮かべたリューが近づいてきて、小言を幾つも言う。
レベル差を考えろだとか、私が武器を渡していなかったらどうなっていたことだかとか。とかとか。
そう言いながらも、武器が無くなった時にミノタウロスを粉砕するのではなく武器を渡すのみにした辺り、リューが自分の事をある程度信用してくれているのだという事が分かり、スネークは少し微笑む。
「なにを笑ってるんですか」
「いや、案外信用されているようで良かった。それだけだ」
「そんなわけないでしょう！　あなたが馬鹿だって言ってるんです！」
今度は照れながらも怒るところを見て、スネークはこのエルフがただ気難しい性格なだけで、本来はコロコロと表情を変えるどこにでもいる少女なのだと理解した。本人に言えば否定するだろうが。
そんな些細な掛け合いをしたすぐ後、戦闘の疲れが出たのかスネークはダンジョンの壁に寄りかかって思わず尻を地につけた。
なんとなく自分の老いが隠せていない事に顔を顰めていると、リューはポーチの中のポーションを手渡した。
「やっぱり、無理していたんですね」
「戦闘中だった。ああするしかないだろう。脱臼ぐらいは軽いもんだ」

骨が折れてたら考えたかもなと笑うスネークに、リューはコメントできず、ただその手に握ったポーションの瓶を逆さまにして肩にその中身をかけることしかできなかった。

◇

「本当に、食べるんですか？」

若干引き気味のリューの問いに、スネークはさも当然かのように返す。

「当たり前だ。いいか、腹が減っては戦はできぬというジャパンの諺があってだな」

その諺の意味にはさしものリューも賛同する。むしろ異論はない程に。

だが、その食事の内容はとても問題だ。

オラリオ内のレストランに委託した弁当。問題はない。

ファミリア内の食事当番で作らせた弁当。一部の人物を除けば問題はない。

冒険者用の保存食。味はともかく問題はないだろう。

だが、現地調達（ダンジョン内のもの）でキャンプ料理（サバイバルビュアー）というのはいかがなものか。いや、いいはずがない。むしろ問題しかない。

そもそもダンジョン内のものといったら鉱石やモンスター、ごく一部の階層にある植物な訳で、それも１８階層に自生するハニークラウド（雲菓子）などでない限りは食用にはとても耐えられない。

それなのに、それなのに！

「モンスターを食すなんて前代未聞ですよ」

「そうなのか？　どうして誰も考えなかったんだろうな？」

さも当然のように言いながら魔石を取り出さない事で塵芥と化す事ができなかったミノタウロスの肉は、スネークの肉屋の店主もかくやという手際で瞬く間に薄切り肉と化していく。見た目だけは確かに牛肉だ。誰も言わなければミノタウロスの肉だと気づくこともあるまい。

だが、その解体現場を目撃したリューはそうもいかない。
慣れた手つきで自然武器の破片から火をおこし、金属製の鍋を火にかけてポーチから調味料を取り出す。
「ここまで立派な肉だとステーキにしたいところだが……今回は試してみたい食い方があるからな」
そのためにわざわざ薄切りにしたのだと自慢気に言いながら、スネークは取り出した黒っぽい液体を鍋に入れる。すると、途端に甘くもどこかしょっぱい独特な匂いがダンジョン内に広がり、リューの鼻を刺激する。
ミノタウロスの薄切り肉を鍋にいくらか広げ、黒い液と一緒に焼く。
火が通るまでに少々の時間がある。そこでさらにどこからともなく卵と底の深い皿を二つ取り出し、片方に卵を割り入れてリューに皿ごと渡す。
「その卵、どこに入れてたんですか」
「いいかリオン。世の中には知らない方がいいこともある。俺のポーチの中身のようにな」
言うつもりはないのだと認識したリューは、素直に皿を受け取り、更に出された二つの竹でできた棒も手に取る。
「これは？」
「それは箸（チョップスティック）という、東洋（ジャパン）の伝統的な食事道具らしい」
こう使うんだと言い、なかなかどうして器用に二つの棒を操ってスネークは再び鍋に追加の肉を入れていく。
そろそろ最初の肉が焼ける頃、スネークは箸で卵を溶いてさながらソースのように変化させた。そして火が通った肉を一切れ取って、卵のソースの中に肉を通す。黒い液の色と卵の黄色が混ざり合って、なんとも言えない色に変化する。
そのまま口の中まで肉を運び、咀嚼する。その瞬間だ。
リューはまるでスネークの目が黄金色に光ったかのように感じた。実際光っていたのかもしれない。そう感じさせる程に、彼の表情は喜びに満ちていた。

「美味すぎる！」
その叫びは、ここがダンジョン内だという事をリューが一瞬でも忘れ去るのには十分な程のインパクトがあり、本当に大丈夫なのかと心配になる程のものだ。
一応周囲のダンジョンの壁は破壊してあるが、この声を聞いてやってくるモンスターがいないのかが気がかりで仕方なかった。
「やはりジャパンの料理を試してみてよかった。牛肉の旨味とこの『砂糖醤油』なる調味料の調和性は凄まじい。甘じょっぱいという言葉を聞いた時には、甘いのかしょっぱいのかどっちなのかはっきりしてほしいと思ったが、いや確かにこれは『甘じょっぱい』だ。それ以外に説明がつかん。そしてこの卵。濃い味をマイルドにするだけでなく、肉の持つ熱を取って食べやすく変えている。肉は丸焼きとステーキに限ると思っていたが、いや、それは間違いだったようだ。ほらリオン、お前も食ってみろ。美味いぞ」
いやに饒舌になったスネークにリューはぽかんとしながらも、その皿に置かれた肉をまじまじと見つめる。
ミノタウロスの肉。モンスターの肉を食べようなんて考えた奴は、一応、大昔にいた……らしい。その人物は一口食べた後に、もう二度と食べたくないと口にしたというが、スネークが言うにはとても美味だという。
一応、出された物はヤバいものでもなければ食べる精神のリューは、意を決して不慣れな箸を握る。
親指と人差し指を上手い具合に使い、卵をとかして肉を通す。黒い液体が染みた肉が、黄金色の衣を纏って煌びやかに輝く。目を瞑ってそれを頬張るとその口内に広がったのは、想像の真逆の味。
信じられない程に美味しいのだ。
普通に流通している牛の肉と比べても遥かに少ない筋。しかし、かといって柔な肉という訳ではなく、しっかりとした肉質はミノタウロス特有のものだとはっきり分かる。噛めば噛むほど広がる肉汁と旨味が口の中を瞬く間に占領していき、そこに『サトウジョウユ』なる甘くもしょっぱい不思議な味が加わり踊りだす。その濃い味わいを

卵が口の中を駆けまわる事で中和し、信じられないほど後味は残るのにサッパリ食べられる。
　こんな料理食べた事がない。それがリューの感想であった。
「悔しいけど、美味しいです」
「そうか！　気に入ったか！　まだ肉はあるからどんどん食ってくれ！次は、野菜も用意して食いたいなぁ！」
　戦利品を使った食事は、まだもう少し続きそうだ。